侵略者

晴

昨日と同じ朝、いつも通りの日常を過ごすと思っていた。いや、皆は変わらない、平凡な日なのだ。
私を除いて……。

＊＊＊＊＊＊

「おはよう、なんか寝不足だよ？　ゲームのしすぎ？」
「おはよう、かなみ。違うよ、ただ単に寝られなかったんだよ」
そうなんだー。寝不足だと体育辛いよ？　と心配そうに私の顔を覗く彼女に、どうして寝られなかったなんて言えない。
昨日の夜、目に映るもの全ての事柄は目に映るものと同じなのか？皆が青と言っているものは、本当に青色なのだろうか？　など哲学的なことを考えてしまい、深い思考の渦にのまれてしまったのだ。自分の頭には、荷が重すぎる議題だというのに……アホなことをしてしまった。
「今日の体育はバレーでしょ？　準備体操だけ頑張れば、サボっていても他の人がやってくれるから大丈夫だよ」と、私は笑顔を作った。
「もう……倒れても知らないんだからね！」
彼女が私に忠告をしたところで、HR を告げるチャイムが鳴った。また後で、と声をかけ、席に戻った。
席に着くと同時にガラガラとドアを引く音が響き、入ってきたのは……。
「……っ！？」
……び、ビデオカメラ？？　担任の悪ふざけなの！？　……だけど、皆はいつも通りの、担任に向ける視線をビデオカメラに向けている……。
挙動不審にビデオカメラとクラスメートを交互に見ていたからか、ビデオカメラに話しかけられた。
「どうした？　挙動不審に教室を見渡して……どうかしたのか？」
「え、ぁ、いや、な、なんでもないです……」
「そうか、それならちゃんと聞きなさい」
ビデオカメラは私から目線を外すと、話の続きを再開し始めた。
声まで違う、なんて今さらな事を考えていたら横からの視線を感じ、見てみるとかなみが口パクで「ね　ぶ　そ　く　の　せ　い　？」と聞いてきた。それを見た瞬間、理解してしまった。あれは、あのビデオカメラは私にしか見えてないのだと……。

その場は、なんとか「ち　が　う　よ」と返せたが、結構精神的にきてしまった。
どうして、あれは私にしか見えてないのか、担任はどうなったのか、私はどっかのアニメの主人公で今から異世界にでも連れていかれるのか、どっちかというと主人公よりヒロインがいいなぁとか、頭の中がごちゃごちゃしている状態でバレーに参加したのが悪かったのだと思う。バレーボールが頭にクリティカルヒットし、目の前が真っ暗になった。

＊＊＊＊＊

……ここは……保健室か、誰かが運んでくれたのかな……後で、お礼言わないと……。
時計をみると、長針は7を、短針は5を指していた。もう、夕方だなぁ、かなみはもう帰ったかな……と思い耽っていたら、ガラガラと保健室のドアを開ける音がした。そして、コツコツと靴の音が、私がいるベッドに近づいてきた。
影がカーテンの外で止まった。
「気分どうだ？」
「……っ！！」
あいつだ。ど、どうしよう…
「……ぁ、だ、大丈夫で、す……」
口が勝手に動いた。そして、“気付いていることを知られてはいけない”と頭の中から湧き出てきた。
「そうか、それなら良かった。お前の荷物、由比が纏めてくれたぞ」
といいながら影が腕を上げて、荷物を持ち上げた。
「あ、ありがとうございます…」
「はっはっ、お礼なら由比に言ってくれ。凄く心配していたぞ」
「そう、ですか…」
かなみに後でお礼言わなきゃ……そのためには現状をなんとかしないと……！！
「……」
「あ、あの……？」
「……はぁ、お前気づいているだろ？　いいよ、その猿芝居。鬱陶しいからさ」
心臓をわしづかまれたような気分になった。呼吸ができない。
「なんで、よりによって俺のとこなんだよ。面倒くさいんだよなぁ……」
「なにを……言っているんで、すか？」
「何って、これのことだよ」
影は言い終わる前に、白いカーテンを掴み、開けた。
「気分はどうだ？」
キュインンと音をたてた、カメラのレンズが私を捕らえ、口をパクパクとさせている私

を映し出した。
「まさか、気付いてないとでも思ったのか？お前、間抜けだな、あんなにも分かりやすい反応してくれたら誰でも分かるだろ」
くっくっくと肩を震わせながら笑っている。どこにも口なんてないのに……。
「わ、わ、私を……どうする……っつもりですか？」
私はここで死ぬのだろうか、そんなの嫌に決まっている。まだ、したいことがあるのだ。
「どうしようか、ここでお前の存在を消してもいいなぁ、その方が楽だ」
ビデオカメラはスーツの胸ポケットに手を入れた。怖い、恐い、コワイ、それしか出てこない。
「あははは、嘘に決まっているだろ？消す方が面倒だ」
あいつはポケットから手をだし、両掌を私に向け、ヒラヒラとさせた。何もしないという意味だと思うが、気を抜いてはいけない。
「……それに、消す必要性がないしな」
あいつは手をズボンのポケットに突っ込み、ベッドの淵に座った。どういうつもりだろうか？　敵に背を向けるなんて……いや、私のことを敵として見てないのかも……。
「もう、俺は帰るんだよ。地球でする仕事も終わったしな」
「え、帰る……？」
それに、地球での仕事ってなんだろう？
「ああ、だから例えお前がこの俺のことで騒いだとしても俺はいない。あ、勘違いするな、この位置にいるやつはいるから、安心しろ」
そして続けて、まあ、俺がいるときに騒いだとしてもお前にしか、わからねぇだろうから意味ないがな、とビデオカメラは私にレンズを向けた。なんとなくだが苦笑している、と思う……。
「そうだ、聞きたかったことがあるんだよ。地球人からみて、どう思う？」
ビデオカメラは思い出したように聞いてきた。どう思うとは、頭がビデオカメラで体はスーツ姿という格好のことを指しているのだろうと思うが……どうしようか、本心を言った方がいい……よね。
「え、えっと、地球人全員が思うかは分からないですが、中々様になっていると思います……よ？」
「……物好きなやつだな、まあ、ありがとうな」
ビデオカメラの彼の表情は変わらなかったが、空気が嬉しそうな雰囲気に変わったように感じた。これなら、あのこと聞けるかな……？
「あ、あの、一つ質問をしてもいいですか？」
「ん？　なんだ？　答えられるものなら答えてやってもいいぞ」
私はありがとうございますと言い、あの疑問であった、地球での仕事とは何かを聞いてみた。

「あー、そうだな、お前にも分かるように言うと、調査っていう単語が近いと思う。地球というのは、どういうものなのかを調べに来たんだよ」
「貴方は研究員ってやつですか？」
「地球でいうとそうかもしれないな」
「じゃ、じゃあ！　地球を攻撃しにきたわけじゃっ！？」
「攻撃するなら、そんなことしないんじゃないか？」
　確かにそうだ、こうも簡単に他人と入れ替われる高い技術を持っている人たちがそんなまどろっこしいことをしない、と思う……。……ん？　なんだろ、何か引っかかるような……。
「おっ、もうこんな時間だ。短いお喋りだったが楽しかったぜ。じゃあな」
　彼は立ち上がり、腕についている腕時計なようなものを操作し始めた。それと同時に私に強烈な眠気が襲ってきた。
「ま、まって……っ！！」
「次、目が覚めた時には元通りになっているはずだ」
　もう、だめだ。まぶたがお……もい……。

＊＊＊＊＊

「――――っ！！」
　ガバッと布団を捲りあげ、私は起きた。時計をみると、長針は7を、短針は5を指していて……あれ、夢……？　そんな、じゃあ担任は……！？
　私が茫然していると、カーテンの向こう側から声が聞こえてきた
「おーい、起きたのかー？　体調は大丈夫かー？」
　担任の声だ……。じゃあ、彼は帰ったんだろうか……？
「あ、はい、心配をおかけしました。もう大丈夫です」
　私は、そう返事しながら靴を履いた。早く、確かめなければいけない。という思いに急かされて……。
　シャッとカーテンを引いた先には、見慣れた担任の顔があった。
「おっと、ビックリするじゃないか！　もう、立ち上がって平気なのか？」
「せ、先生……先生こそ大丈夫ですか？」
「はぁ！？　お前、変なとこ打ったのか？」
　担任は眉を顰めながら、医者に行った方がいいんじゃないか？なんて失礼なことを言ってきた。勿論、平気なので丁重に断った。
「まぁ、お前が大丈夫ならいいが……そうだ、荷物持ってきたぞ」
　ほら、とカバンを渡してくれた。そういえば、あの時荷物を受け取ってなかったなぁ、なんて思いながら受け取った。

「わざわざ、ありがとうございます」
「どうってことないさ、そうだ一応家まで送って行ってやろうか？」
「いえ、本当に大丈夫なんで……お気遣いありがとうございます」
「無理しなくていいんだぞ？」
「本当に大丈夫なんです。それに、なんとなく歩いて帰りたいなぁって思って……」
そこまで言うと、担任はそうか、わかった。と言って引き下がってくれた。

＊＊＊＊＊

彼女は制服を整え、俺が持ってきた荷物の確認をした。２回も荷物を持ってくる羽目になるとは、彼女には迷惑をかけられてばかりだ。
「先生、荷物ありがとうございます」
「ああ、全部入っているか？」
「はい、大丈夫でした」
「そうか、よかったよ。実は俺が保健室の戸締りを確認しないといけないから、……じゃあな」
「そうなんですか、分かりました。先生さようなら」
「はい、また明日な」
スカートを翻し、彼女は朱色に染まった廊下を歩いて行った。それを、キュインンと人間が出さない音を出している者が見ていることに気付かずに、彼女は徐々に暗くなる廊下を歩いて行った。

To Be Continued……？